

語り部ニュース

十一月二十五日

原田二郎さんが福井県高浜町青ノ郷公民館（婦人部主催）で約百人を前にシベリア抑留の体験を話されました。

ご老体頑張ってます！

原田二郎さん（85歳）シベリア抑留体験の講演

ご自身の生立ちから日本での大工の技術がシベリア抑留中の使役で生かされたことや兵隊の衛生兵の仕事内容及び当時、病氣や怪我でなくなる兵士は、皆「お母さん」と言って亡くなった。



発行
NPO法人舞鶴・引揚
語りの会
住所〒625-0133
舞鶴市字平
舞鶴引揚記念館内
TEL0733-68-0568

又歌手で故三波春男氏（浪曲師南条文若）はシベリア抑留中の仲間で、そのエピソードなど、「時間強、面白おかしく話され大変好評でした。」

演

六月に来館した清水まなぶ氏が
長野放送局
川口氏と再来館

まなぶんこと清水まなぶさんの「沈まぬ夕陽」先月、岩田さんから「例の長野の青年が、二十一日に新しい『赤いせんべい』を持って来るそうやで」と連絡があり、五カ月ぶりの再会を楽しみに待ちました。思えば一昨年、お世話になった泰草村の中島田鶴先生の体験談「沈まぬ夕陽」を基にし、長野県を中心に活躍するシンガーソングライター清水まなぶさんが今年六月に来られた時、私が案内し、その折引揚公園から海に向かって初披露された歌声に私は、あふれる涙をおさえることが出来ませんでした。そのCDが出来あがり、CDをお土産に再来館されました。同行の川口さんは、丹後の大宮町出身で私の母校である峰山高校の後輩だという



ご縁のお方でNHK長野放送局のディレクターをされています。渋滞で予定より遅れて到着されたためにゆっくりお話が出来なくて残念でしたが、戴いたCDを聞いてまたしても涙、涙！清水まなぶさんは二年前にも、シベリアへ抑留されたお祖父様の手記をもとに歌った「回想」を作られています。愛だ、恋だと歌って

いる青年の人が多い中、彼の「戦争」や「引揚」を歌い続ける姿には感動と感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。『まなぶん』彼の作った「沈まぬ夕陽」の歌詞をご紹介します。

上げて
希望と不安を抱える私たちを
荷台に乗せて
昭和十五年
十五歳の春
両親に連れられて
広い大地に夢を見て海を渡ってきたまもなく太平洋戦争に突入しても
開拓民はただ一途に
関東軍を信じていたけれど
昭和二十年八月九日の
ソ連参戦によって
男たちは
根こそぎ召集をうけ女が家を守るが
集落も
襲撃で荒らされて
着の身着のまま逃避行が始まる
銃弾が流れる中空腹に喉の渇きで
精神も消耗
もう疲労困憊で
自決の声が出るほど自分が何者かわからなくなる
中略
なんで生まれてきたのだろう
義勇軍の少年が
母に宛てた手紙の言葉が甦る

「わたしたちどうして？こんな目に遭わなきゃならないの？」小さな体の妹の声が甦る
 「死んではならん！どんなことがあっても生き抜いてくれ」開拓団長の声が甦る
 「お母ちゃん お母ちゃん いやだ！」子どもたちの叫び

声が甦る
 もう二度と戦争を起してはならん！何万人も何十万人も何百万人も失われた命、魂の叫びが言葉が今甦る
 大きな太陽が真っ赤に燃え落ちてゆく はるか彼方の地平線に
 大きな太陽が真っ



赤に燃え落ちてゆく はるか彼方の

地平線に 夢を見て
 確かに夢を見た
 青年達を見送る岩田さんの言葉「お二人が、NHKの局長や、森繁久弥さんのようになって、決してこの引揚記念館を忘れないで下さいよ」と……私も同感です。
 (松岡幸代記)

る世界の動き」を挙げた。冷戦終結による世界平和を期待したが、「残念ながら平和を推進する方向には進んでいきませんでした。」として米国の同時多発テロやイラク戦争などにふれた。日本の将来への心配を問われ、陛下は「私がむしろ心配なのは、次第に過去の歴史が忘れられていくのではないかと言うことです」と切り出して、第二次世界大戦に至る昭和前半の道のりを回顧。「昭和の六十有余年は様々な教訓を与えてくれます。過去の歴史的事実を充分に知って、未来に備える事が大切だと思います」と締めくくった。と朝日新聞に掲載された。我々の活動は引揚記念館の「語り部」として昭和の歴史の一端を担っている。

運搬 「兵卒のシベリア捕虜記」

著者・門間祐太郎
 編集・南澤 武

運搬、木材積み込みと積み下ろし作業
 伐採した原木の貨車への積み上げ作業も危険極まるものでした。何処もここも凍りついている中で重い原木を三、四人がかりで車台のべらばうに高い無蓋貨車の上にノルマだけ積み上げて行く作業です。少しでも協力者の呼吸が狂ったら最後、転がり落ちてくる原木丸太の下敷きになるか、跳ね飛ばされお陀仏になるかです。積み下ろし作業もこれと同様に危険なものでした。積み上げられた原木を地面に下ろす作業ですが、これも一寸呼吸が狂えば下積み丸太が動き出して三メートル以上の高いところから転がり落ちるの死の重傷を負う者が

信濃丸
 当記念館と関係の深い船のお話です。
 引揚船「信濃丸」、この名を初めて見たときから気になっていた。そうです、日露戦争で日本海海戦の功労船「敵艦見ユ」の電信を最初に発した船と同名の船である。ところがどっこい、ひよんな事から「信濃丸」を調べてみると、これが同じ船ではないか。元々日本郵船の貨客船が日露戦争の時徴用され、仮装巡洋艦としてバルチック艦隊の索敵活動をしていて、先の有名な電信を発したのである。講談ならこのあたり扇でもって机を何度かたたく名場面。さらに海戦の後半残敵掃討戦で

は他の2隻の仮装巡洋艦とともに敵艦「シンイ」を捕捉し降伏に追い込んでいる。まさに面目躍如の働き。この働きによって歴史に名を残すことになった。この船その後、先の大戦でも兵員輸送に関わり、水木しげるも乗っているし大岡昇平の「俘虜記」にも出てくる、運良く撃沈もされず生き残った。何と運の強い船であろうか。中国の革命家孫文が日本への亡命にも関わったという。ナホトカから舞鶴まで昭和25年の1244人を最後に延べ38621人の抑留者を運んでいる、ロシアと関係のある船ではある。貨客船、仮装巡洋艦、兵員輸送船、引揚船、魚運

搬船と波瀾万丈、その後1951年、51年の船齢で解体、ドラマの生涯を終えたそうである。この船のサロンの椅子が今も横浜の「山手資料館」とレストラン「馬車道十番館」に12客が残されている。背もたれ部分に「二引きの旗」印(日本郵船のトレードマーク)を彫り込んだ誠に重厚な四脚の回転椅子である。興味のある方は「信濃丸の椅子」なるHPをご覧ください。信濃丸の日本海海戦での働きについては、司馬遼太郎著「坂の上の雲」、別宮暖朗著「日本海海戦」、福井静夫著「日本特設艦船物語」等に詳しい。
 森下

11月の活動実績

稼動日数 29日
 ガイド数 3,497人
 予約数 17件
 予約人数 403人
 稼動会員数 17人
 募金箱 71,615円
 ご苦労様でした。

「語り部」として昭和の歴史の一端を担っている。

語りの会忘年会のお知らせ

・12月20日(日)19時より
 ・ホテルマーレかたにて
 ご出席の方は谷口栄一まで
 至急ご連絡下さい
 0773-62-4485

出ました。これらの作業も皆世慣れた古参兵殿は、地上で指揮して応収の高齢兵だけが車上に追い上げられる破目になることが多かった。
 伐採の作業では伐採した丸太を川に落し、筏を組む作業のことが思い出されます。ヘソあたりまで川に遣って(無論防水服などありません。下帯一本、素足です)付近に密生している白樺の小枝を石で叩いてロープを作り、このロープで伐採され川に浮かんでいる丸太をつないで筏を作っていく作業です。これもまた地獄で青鬼、赤鬼に責め、苛まれるような苦しみでした。
 続く